

THE BOOK REVIEW PRESS

図書新聞

3584号

〒168-0075 東京都新宿区高田馬場3-13-1
（神戸オフィス）
〒168-0071 東京都江東区亀戸8-25-12
電話03(5637)8318 FAX03(5637)3919
購読料（送料共）1年48回13200円
半年24回6840円 振替00190-2-673481

定価300円
（本体273円）

発行 武久出版(株)

2023-3-25

書評でつながる
読書コミュニティ

あなたの書評 お待ちしています

本が好き!
HONGASUKI

www.honzuki.jp

渡辺京二著『夢と一生』(河合文化教育研究所)を読む

渡辺京二 著
夢と一生
2・10刊 A5判98頁 本体1000円
河合文化教育研究所

一生を貫く
「小さきもの」への
視座と夢
「河合ブックレット」の掉尾を飾る一冊

一九八六年の刊行開始以来、河合文化教育研究所が手掛けてきた「河合ブックレット」シリーズが、四三冊目となる渡辺京二氏の『夢と一生』をもって幕を閉じる。同研究所は河合塾を母体としながら、偏重値に典型的な受験教育をほろかに超えて、従来の大学や公教育の枠組みにも収まらない、実に豊かな知的文脈を形づくる舞台となってきた。同ブックレットはこれまで、研究・講演活動のエッセンスである。大学受験対策な

どを意図的に取り払い、受験生のために知的な糧となるものを、この狙いで開催された文化講演会がベースになっていくという。既成の社会や文化のあり方、時代への批判的視座をも貫いた、自由闊達で脱領域的なシリーズの終刊を惜しまずにはられない。その掉尾を飾る一冊が、昨年末に亡くなった渡辺氏の最後の夢と一生を語る内容であることが何より感慨深い。彼は長年、同研究所の主任研究員を務めた。本書の解説「河

合文化教育研究所における渡辺京二氏」を書いた加藤万理氏は次のように述べている。「渡辺氏を主任研究員に招いたこの河合文化教育研究所は、研究所とは名のつくもの、どこにもないような奇妙な研究所だといえる。母体は予備校の河合塾だが、予備校という受験産業を彷彿とさせるものは何もない。むしろこのことは何も無い。とにかく何をやるのも何を批判するのでもまったく自由で、

ただを追っているような研究所だった。主任研究員のオプティゲーションと云えば、年に一度の主任研究員会議に出席して自分の仕事について発表することだけである。なにもかもが自由というカルテスというか、ある意味理想的といえは理想的な研究所であった。

渡辺氏は、まさしくこの気風になされた人だった。制度の中の専門知とは別の、彼がどのような人であったか、存分に語られている。本書の解説にある描写のとおり、私も二年ほど前、熊本駅から市電に乗って、健康神社近くの閑静な一角にある渡辺氏の自宅を訪れた。完結した『渡辺京二評論集』全四巻(叢書房)を担いで、書評紙の人間が珍しく来熊したとあって、彼はまるで少年のように相好を崩し、熱を込めて語った。当時、七〇歳を過ぎていたとは思えない精神の躍動感や、いまも生き生きと

思いつく。同じ熊本出身の谷川健一・谷川雁の弟、吉田公彦氏(日本エディタースクールの創設者)の誘いで、本紙とも縁の深い日本読書新聞に入った一九六〇年代前半のころを昨日の如くに振り返り、さらに話には縦横に広がって、月参りに来たお坊さんが唱える読経も気にせず、何時間も語り続けたのである(本紙二〇〇一年九月一日号収録)。

書評紙に関わったえいしと親近感、そして本と人間、歴史と時代とを自由に交錯させて広げながら、一貫してみずからの人生における初発の問いと省察を話さずいなく語り口に、強く魅せられた。一九三〇年生まれの彼は、幼少期を北京と大連で過ごし、敗戦後、大連日本人引揚対策協議会の活動でマルクス主義と出会う。文学で自由を求めた自分と、マルクス主義に惹かれる自分とは相容れず、矛盾を生きたをえなかつた。自分の個を追求したい文学的な自分と、コミュニストでありたい自分とが、ロシアの国章である「双頭の鷲」のように分かれ、引き裂かれる群れにならぬと、一人でしかいられない思いと、群れのなかで理想を求めていく志向の矛盾。それは引揚後の共産党活動でさらに深まり、彼自身の大きなテーマとなる。個と共同のもの、知識人

とチロルドの問いは、まさしく一九世紀ロシアのインテリゲンツィアを苦しめた「始末に負えない(呪わしい)問題」だった。共産主義はそれを強圧的な全体主義でねじ伏せたが、問題は二〇世紀の知性を見直すようになるのである。渡辺氏は療養所で「民衆の原像」に触れた。一九七五年に出た初めての評論集『小さきもの死』(叢書房)の冒頭の文章が思い出される。『少年からコミュニストへの変身』として転向とが重なって、魂の交わりを求めたいという欲求の絡み合い、そしてそこから出てくるパリエーションで日本近代史を見る視点は、近代の根を掘り下げる視座となり、やがて「逝きし世の面影」を頂とする彼の作品へと結実していくのである。渡辺氏にとっての思想的原点は、結核療養所で過ごした四年半、「ゴリーキーの表現を思わせる」『私の大学』にあったという。「私はこ

で現実の民衆というものに初めて触れた。そしてそういう実直な民衆の姿から、観念から観念へと、つみの重国少年から共産党員へと、無限に移動している自分というものを、そこには次のように見直すようになるのである。「緊急避難として始まった国民国家の形成・展開こそ、わが近代のビッグ・ストーリーである。だが私は老いて九〇歳いままらそういって国家次元の文章が思い出される。『少年からコミュニストへの変身』までもなく、これは彼の思想的核を形づくった療養所での体験が元になっている。人間社会の進歩の歴史や、世界史の展開のなかで、打ち捨てられ、犠牲にされ、忘れ去られてゆく、小さきものの死を目の当たりにし、その運命の理不尽さを越えたいと思いついたところに、彼を突き動かす思想の原動力があったのだ。昨年刊行された『小さきもの近代』(叢書房)をめぐって、第一章「緊急避難」(本紙編集・米田綱路)



夢と一生
渡辺京二

合文化教育研究所における渡辺京二氏」を書いた加藤万理氏は次のように述べている。「渡辺氏を主任研究員に招いたこの河合文化教育研究所は、研究所とは名のつくもの、どこにもないような奇妙な研究所だといえる。母体は予備校の河合塾だが、予備校という受験産業を彷彿とさせるものは何もない。むしろこのことは何も無い。とにかく何をやるのも何を批判するのでもまったく自由で、

ただを追っているような研究所だった。主任研究員のオプティゲーションと云えば、年に一度の主任研究員会議に出席して自分の仕事について発表することだけである。なにもかもが自由というカルテスというか、ある意味理想的といえは理想的な研究所であった。

渡辺氏は、まさしくこの気風になされた人だった。制度の中の専門知とは別の、彼がどのような人であったか、存分に語られている。本書の解説にある描写のとおり、私も二年ほど前、熊本駅から市電に乗って、健康神社近くの閑静な一角にある渡辺氏の自宅を訪れた。完結した『渡辺京二評論集』全四巻(叢書房)を担いで、書評紙の人間が珍しく来熊したとあって、彼はまるで少年のように相好を崩し、熱を込めて語った。当時、七〇歳を過ぎていたとは思えない精神の躍動感や、いまも生き生きと

思いつく。同じ熊本出身の谷川健一・谷川雁の弟、吉田公彦氏(日本エディタースクールの創設者)の誘いで、本紙とも縁の深い日本読書新聞に入った一九六〇年代前半のころを昨日の如くに振り返り、さらに話には縦横に広がって、月参りに来たお坊さんが唱える読経も気にせず、何時間も語り続けたのである(本紙二〇〇一年九月一日号収録)。

書評紙に関わったえいしと親近感、そして本と人間、歴史と時代とを自由に交錯させて広げながら、一貫してみずからの人生における初発の問いと省察を話さずいなく語り口に、強く魅せられた。一九三〇年生まれの彼は、幼少期を北京と大連で過ごし、敗戦後、大連日本人引揚対策協議会の活動でマルクス主義と出会う。文学で自由を求めた自分と、マルクス主義に惹かれる自分とは相容れず、矛盾を生きたをえなかつた。自分の個を追求したい文学的な自分と、コミュニストでありたい自分とが、ロシアの国章である「双頭の鷲」のように分かれ、引き裂かれる群れにならぬと、一人でしかいられない思いと、群れのなかで理想を求めていく志向の矛盾。それは引揚後の共産党活動でさらに深まり、彼自身の大きなテーマとなる。個と共同のもの、知識人

とチロルドの問いは、まさしく一九世紀ロシアのインテリゲンツィアを苦しめた「始末に負えない(呪わしい)問題」だった。共産主義はそれを強圧的な全体主義でねじ伏せたが、問題は二〇世紀の知性を見直すようになるのである。渡辺氏は療養所で「民衆の原像」に触れた。一九七五年に出た初めての評論集『小さきもの死』(叢書房)の冒頭の文章が思い出される。『少年からコミュニストへの変身』として転向とが重なって、魂の交わりを求めたいという欲求の絡み合い、そしてそこから出てくるパリエーションで日本近代史を見る視点は、近代の根を掘り下げる視座となり、やがて「逝きし世の面影」を頂とする彼の作品へと結実していくのである。渡辺氏にとっての思想的原点は、結核療養所で過ごした四年半、「ゴリーキーの表現を思わせる」『私の大学』にあったという。「私はこ

で現実の民衆というものに初めて触れた。そしてそういう実直な民衆の姿から、観念から観念へと、つみの重国少年から共産党員へと、無限に移動している自分というものを、そこには次のように見直すようになるのである。「緊急避難として始まった国民国家の形成・展開こそ、わが近代のビッグ・ストーリーである。だが私は老いて九〇歳いままらそういって国家次元の文章が思い出される。『少年からコミュニストへの変身』までもなく、これは彼の思想的核を形づくった療養所での体験が元になっている。人間社会の進歩の歴史や、世界史の展開のなかで、打ち捨てられ、犠牲にされ、忘れ去られてゆく、小さきものの死を目の当たりにし、その運命の理不尽さを越えたいと思いついたところに、彼を突き動かす思想の原動力があったのだ。昨年刊行された『小さきもの近代』(叢書房)をめぐって、第一章「緊急避難」(本紙編集・米田綱路)